

ありふれた世界に騎空 団

ムリエル・オルタ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本来だったら年越しと同時に投稿する予定だったものです。

寝起きに思いついたものを書きなぐった作品を書き直した作品。

続くかない○

目次

ありふれた世界に騎空団

1

騎空団

8

ありふれた世界に騎空団

異世界に召喚されたクラス一同。召喚したと思われる存在である教皇イシユタルより告げられた内容に光輝やソレに連なるトップカーストの人物も賛成し、他の所為とも流され戦争することになりそうなその時、一人の声がその場に響いた。

「僕は……いや、私は反対だ。まだよく分からない状態で、その選択肢しかない状態でそんなこと、出来る筈がない」

「じゃあ、マリアは助けないっていいのか!?俺達には、力があるんだぞ!」

「力がある人間が高々40人程度で戦争を如何にかする事なんて出来ない。そもそも、人も殺した事のない君たちに何が出来るといふんだ。肉を切り裂き、骨を断ち、断末魔に怨嗟の声、返り血で染まる自分の体に、手に残る切った感触。どれも未経験の君たちがいきなり人間を殺すことが出来るのか?」

そう言った人物は長い金髪に茶色い目の一見したら美少女の様な少年。しかし、その目は冷め切っておりその目線の先には先程反論した光輝が見据えられていた。そして、彼が発した言葉で我に返ったクラスメイト達はざわめきだす。それを傍目に見たいイシユタルはマリアと呼ばれた少年に対してなんだコイツみたいな目で見ていた。そし

て、そんなマリアの発言に対して光輝はなおも言い募る。

「ひ、人を切る訳じゃないだろう？人に似た魔物だって、イシュタルさんも言つてたじゃないか」

「人に似た魔物となると、知性があるだろうし人間へと擬態できるだろう。なら、それは既に人間と定義しても良いだろう。なにより、日本人が海外でなんて言われたか知らないのか？猿だぞ、猿。そのイシュタル殿が自分達より文明の低い民族をそう称しているだけかもしれない」

「い、イシュタルさんがそんなことをするわけがないだろう！」

「何故そう言い切れる？君はイシュタル殿の何を知っているといるというんだ。会つて一時間程度だろうに」

水掛け論である光輝とマリアの論争はその後ぶんすか怒りながら介入した愛子先生によつて有耶無耶になり、その日は疲れているだろうということでは会食だけとなった。この時、生徒の一人はマリアがこういつた場に成れているように見えたと後に述べている。

そうして召喚された日は終わり、翌日。未だ立ち位置を決められずにいたクラスメイト達は王城内に存在する鍛錬場に集められていた。周りには兵士たちが並び、困惑する生徒達。そんな所に一際目立つ肉体を持った男が入ってきた。

「今回からお前たちの訓練を担当する騎士団長のメルドだ！よろしく頼む！」

突然そう言われ、何が何だか分からない彼らにメルドは苦笑いしながら説明をしていった。今回の魔族対人間族の戦争は長く続いており、本来はこの世界で完結させるべきだった。それを召喚出来てもらったクラスメイト達にせめて自衛の手段でも手に入れて欲しいといったものだった。

そうして全員に渡されたのは、薄い銀色のプレート。メルド曰く「アーティファクト」というらしく、遙か昔の神代に存在した技術により量産された身分証明書らしい。ここにきて、本格的に異世界に来たことを自覚した男子生徒達は興奮していた。逆に、女子生徒達は不安なのか一か所に集まっていた。

メルドの説明は続き、血を言つて基礎のプレートに垂らすとその垂らした人物専用のアイテムになるらしい。それぞれ、配られた針で指を刺し血をプレートに付ける。その中には、前日光輝と口論していたマリアの姿もあった。

「一般人の平均的なステータスはオール10程度だ。神の使徒たるお前たちはそれより数倍のステータスだろう。まったく、羨ましい限りだ！」

そう言つて豪快に笑うメルドを傍目に生徒達は皆プレートを凝視していた。マリアもそんな中でメルドを眺め、周りを見た後にプレートを見た。

マリア 18歳 男 レベル192

天職：騎空士（ファイター）

筋力：62000

体力：57900

耐性：60000

敏捷：50000

魔力：70500

魔耐：92800

技能：火属性適正／水属性適正／風属性適正／土属性適正／光属性適正／闇属性適正
／火属性耐性／水属性耐性／風属性耐性／土属性耐性／光属性耐性／闇属性耐性／毒
耐性／物理耐性／剣補正／斧補正／槍補正／杖補正／格闘補正／切り替え／気配探知
／魔力探知／言語理解

「うげっ」

表示されたステータスにマリアから苦しそうな声が出る。先程、メルドが述べた自分たちのステータスは平均の数倍程であり、こんな不思議な数値の出方はしない。しかし、マリアには思い当たる節があった。それは、彼がこの場に居る理由。日本人なら誰

でもある苗字が無い理由に繋がる。嫌そうな顔をしていたマリアを不思議がつてハジメが近寄ってくる。

「どうしたの、マリア？」

「いや、ほら私は本来此処に居ない存在だからなのか、以前の経験がステータスに反映されてるようだ」

そう言つてハジメに渡されたマリアのステータスプレートを見てハジメの頬が引きつる。自身のステータスプレートと見比べ、二度三度見返した後、肩を落とした。きつと、悲しい差があつたのだろう。それぞれが自分のステータスを見て喜び、浮かれている中、鍛錬場の外が俄かに慌ただしくなつた。メルドはそれを感じ取つたのか、近くに居た騎士に外の様子を見るよう伝えようとしたが、直ぐに外から兵士が入ってきた。

「メルド団長殿！至急、城門までお越しく下さい！なにやら、空飛ぶ船に乗つた者たちが「副団長を出せ」と訳の分からない事を、既にクゼリー副団長が対応に行きましたが、どうも人違いでして……」

「何？………まあ、良く分からんが行こう」

兵士より説明を受けたメルドは鷹揚に頷き、その場へ向かう。何故かその後ろに、マリアと焦り気味のハジメ、光輝などのクラスメイトという名の野次馬が続いていくが、気にしない。気にしていないのなら、気にしていないのだ。

そうして、城門に着くとそこには茶髪の騎士甲冑を着た女性とソレに寄り添うように立つ金髪の女性、その背後に立つ黒い鎧を着た騎士、その誰もがかなりの実力者であるのは明白だった。メルドは気を引き締めてその場に向かおうとした瞬間。

「カタリナ！」

「マリア！」

「へ？」

メルドを追い抜くようにマリアが駆け抜けた。気の抜けた様な声を出してしまうメルドを他所に、目の前ではカタリナと呼ばれた女性に駆けつけるマリアの姿があった。そして、そんなマリア達を見る金髪美女の顔が怖い。親でも殺されたのだろうか。

「なんて、羨ま…お姉さまが困っていらっしやいますから、そこまでにして頂けませんか副団長様。それに、ルリアさんも再開を待ち望んでいますし」

「ああ、そうだね。ところで、姉さんは問題を起こしていない？そこだけが少し不安ただけだ」

困惑し、固まる周りを他所にマリアはカタリナに話しかける。カタリナも、そんな彼女の姿に苦笑いしながら背後に居た女性と共に話す。

「そうだな、ヴィーラが居ない間の交渉役を買って出てくれたから問題は無かった。ジータに関してはランロット達はどうにか抑えてくれたよ。まあ、今ここにジークフ

リートを呼んでる時点で察して欲しい」

「ああ、そうかあ…：そうなのかあ」

マリアの諦めた様な声にカタリナはすまないと頬をかく。そうした瞬間、マリアがメルド達の視界から消えた。目線を下に向けるとそこにはマリアとは髪長さ以外違いの無い少女がマリアに抱き着いていた。

これは、本来存在しない歴史。歪み。その歪みがどう世界へ影響するかは誰にも分からない。この物語の先にあるモノは、混沌とした悲劇か喜劇なのか…。

騎空団

「これは、どういう事だ？」

事態を進めたのはメルドの一言だった。押し倒されたマリアを見ながら困惑気味にそう言った。それに合わせる様にクラスメイト達も口々にマリアやその周囲の人物について話し始めた。

「静かにしてくださいさ〜い……あの、マリア君。彼女たちとは一体どういった関係なんですか？」

騒然とした場を取り仕切ったのは意外にも（失礼だが）愛子先生だった。普段のポアポアした雰囲気ではなく、れっきとした教師としての威厳を感じる。ただ、マリア達の存在感の方が強く、影が薄く感じる感はにやめない。

そんな愛子先生の質問に、押し倒した少女をどかしてマリアは立ち上がりなら微笑を浮かべ、答えた。

「では、改めて。騎空団グランサイファー副団長のマリアです。こっちは団長のジータ。改めて宜しく。まあ、恐らく君たちとは別行動だろうけどね」

「別行動ってどういうことだ。俺達は仲間だろう？」

「マリアが言った言葉にすぐさま反論したのは光輝だった。その顔は困惑気味で同時に少しばかりの嫉妬を宿していた。それが、何に対する嫉妬なのかはマリアにも当の本人にも分からないだろう。」

光輝の言葉にマリアは困ったように笑う。それは、出来の悪い子どもにしかりつけるかのようなだった。

「流石に同じクラスに居たからと言って仲間と言われるのはちよつとどうかと思うよ。天之河君。それに、私達もそれなりの規模だが、同時に守るべき人たちも多い。戦いを知らない君たちを守るほどの余裕も無いのさ」

「マリア、それは流石に言い過ぎだろう」

肩を竦めてそう言ったマリアにカタリナが苦言を呈した。カタリナも状況は良く分かっているが、彼らの動きから戦いを知らない人間であることは察したようで、そんな相手から『仲間』と言われているということは何かしらにマリアが巻き込まれていると考えたからだ。流石に、素人を見捨てては後味が悪いというものもある。

「彼らは、素人だろうか？ 戦闘になつたら真つ先に死んでしまうかもしれない」

「分かるよ。しかし、彼らは自分の意思で知りもしなかつた世界の為に戦争に参加するそうだ。私には、カタリナや他の団員たちを守る義務がある。何より、要人も多い。危険な真似は出来ない」

「マリアはそう言いながらカタリナの傍に立つヴィーラや騎空挺に乗っている仲間たちの方向を見やった。そんなマリアの姿にカタリナは苦笑いをした。どうやら、説得するつもりはないらしい。彼らだけで話が終わり、若干解散ムードになったその時、空気になるにかけていたメルドが声を上げた。

「あー、マリア…副団長。すまないが、それは許可できない。少なくとも、私の一存ではどうしようもない」

「メルド騎士団長?…ここで何故とは言いません。しかし、ならば私の仲間の滞在の許可も頂きたい。何かあつてからでは遅いのでね」

「それは勿論だ。しかし、先程要人と言っていたが、それは?」

メルドの言葉にマリアは納得したようで、その代わりに条件として団員の滞在許可を申し出た。彼らは空から来たので関所を通っていない。つまり、不法入国に近い。それを盾になにか無理難題を吹っ掛けられてはたまったものではない。そうマリアは考えたからだ。カタリナとヴィーラもそれには異論はない様で、静かにその場に立っていた。

「メルド騎士団長の質問には後程と言うことで。どこか落ち着ける場所で話すとしてしましよう」

「それもそうだな。……ああ、その騎空挺?つてヤツは王城内にある庭にでも止めて

おいてくれ」

「分かりました」

そう言つてその場は一時的にお開きになった。話に入ることが出来なかつたクラスメイト達は置いてけぼりを喰らつていたが、時期に動き出しそろそろとメルドの後を追つた。一部の男子生徒はマリア達の騎空艇に興味を持ち、近くで見っていた。

くくく

場所が変わつて王城内にある会議室。そこには、王女のリリアーナ。側仕えのヘリーナ。騎士団長メルド。クラスメイトとなり、対面に騎空団の面々となつていた。メンツは団長のジータ、副団長のマリア、ルリア、カタリナ、ヴィーラ、ロミオ、カリオストロと言つた年長者や交渉に長けている面々となつてゐる。騎空団の面々は武装解除しておらず、マリアに関しては全身甲冑でヘルムだけ取つてゐるだけだ。因みに、この場で丸腰なのは召喚組のみでそれ以外は帯剣している。

「それで、もう一度聞くが。君は何者だ、マリア」

「先ほども言つたとおりです、メルド騎士団長。グランサイファー副団長マリア。それ以上でもそれ以下でもありません」

緊張した面持ちで問いかけるメルドに対していたつて平然にそう返すマリア。落ちていた様子でテーブルに置かれた紅茶に口を付けるその姿は、メルドの頭にマリアの身

分が貴族ではないかという予測をたたせる。しかし、どう切り出せばいいのか分からず押し黙ってしまう。暫く沈黙が続いた中、マリアが思いついたかのように提案してきた。

「先ほどは、紹介していませんでしたね。今回、この場に出てもらった仲間の紹介をしましょう」

「あ、ああ、それはありがたい」

マリアの申し出にそう返す事しかできないメルド。既に空気になりつつあるリリーアーナ王女は「アレ、王女なのに影薄い…」とボソツと呟き、背後に控えていたヘリーナに慰められていた。クラスメイト達は、マリアと並ぶ美形たちに男女共に魅了されており、その中心にいるマリアに嫉妬していた。特に男子。

「では、まず団長で姉のジータ。次に、ルリア。元帝国中尉のカタリナ、元アルピオン領主のヴィーラ、騎士のロミオ、錬金術師のカリオストロが今回の会談のメンバーです」
「う、ううむ…」

マリアが並べた言葉にメルドは唸るので精いっぱいだった。帝国？隣国とは違うだろうか…。領主？その若さで？どれ程の才を持っているのだろうか。騎士にしては貫禄が凄いな…。王と言っても違和感はないな。錬金術師？錬成師と何が違うんだ？と、見事にキャパを超えてしまい、理解が追い付いていなかった。それは、騎空団の面々以外全

員に言えた事であり、当の騎空団はと言うと、最後に紹介された錬金術師カリオストロが「美少女を付ける！美少女を！」とマリアに対して抗議し、ジータがそれをなだめていた。

「ま、まあ、分かった。では、こちらの事情を…」

そう言つてメルドは現状を説明した。魔人族との戦争、亜人差別、マリアを含め此処に居る学生たちは神エヒトが召喚した神の使徒であること、光輝が筆頭にこの戦いに協力してくれること、出来れば協力して欲しい事等、様々な事を説明した。時々、同席したリリアーナが補足を入れ順調に説明し、終わった。

それに対して、マリア達は小声で話しながら何かを決めた様だった。ルリアは何度も何かを言っていたが、マリアが頑なに首を振らず、ジータも特に何も言っていなかった。相談が終わったのか、全員が元の位置に戻り、佇まいを直した。そして、団長であるジータが全員で決めた結論を述べる。

「結論から言います。私達は、貴方達に全面協力することは出来ません」
「……………理由をお尋ねしても宜しいですか？」

ジータが言った言葉にクラスメイトはざわつき、リリアーナはその結論に至った理由を問うた。ジータの出した結論に光輝が何か言おうとしたが、近くに居た龍太郎と雫によってそれは阻止された。流石の脳筋も空気は読むのである。

「理由としては、恐らくあなた方は私達を受け入れる事が出来ないからです。私達の騎空団にはエルーンやドラフ……こちらで言う亜人族に似た仲間も居ます。先程の話の内容から亜人は差別対象の様なので、似ている仲間も迫害されるかもしれません。そのような危険は、団長として犯したくない。別に、敵対したい訳ではありません。完全な協力は、無理というだけです。何より、私達の目的は副団長です。この際、この世界がどうなるろうと極論どうでもいいんです」

「お仲間に対しての特別処置をする……と、してもですか？」

「ええ、それは国民全体に伝わる事は無いでしょうし、なにより大本の教会は差別を推奨しているようでは無いですか。どれだけ王国が何を言おうと、教会が是とすれば通る。違いますか？」

そう言ったジータにリリアーナは苦虫をかみつぶした様な顔をした。確かに、教会の影響力のある王国では亜人奴隷こそ存在はしないものの、亜人への差別は奴隷が存在する国家以上であり、いくら王族が差別させない様に心がけると言ってもそれが確実に実行される確証は無いのだ。

会話が区切られた瞬間に、隙を窺っていたのか、光輝が前へ出てきて言い募り始めた。脳筋とオカンは突破されたらしい。

「なんでそんな事が言えるんだ!?!この世界の人が苦しんでいる!力があるなら、助ける

のが当たり前じゃないか！」

「力があるなら……ね。私達は、慈善団体でも無ければそんな後に禍根を残すようなその場だけの善意なんてやるつもりは無いの。なにより、宗教関連での戦争なんて介入したくも無いわ」

光輝の言葉もバツサリと切って捨てたジータにあり得ない者を見るような目をする光輝。彼は、自分の中の世界でしか生きていないが故に理解できなかったのだろう。彼の中では、世界を救ってハッピーエンドなのだろう。その後を考えない。シンデレラが王子と幸せになりましたのその後を誰も考えない様に。ゲームの主人公の様に万事上手くいくと考えていた。

「それと、副団長が言っていた要人って言うのは、公爵家の次期当主とその婚約者や騎士団団長、王族等高い身分の方が多いからです。何より、その中にもエルーンやドラフも居る。彼らの身の安全を確保するのも私達の役目です」

その後、リリアーナとメルドによってクラスメイト達は退出を余儀なくされた。その際、光輝が激しく抵抗したがまだ力も弱いため、他のクラスメイト達に引きずられながら部屋を出ていった。これも、話を余計に拗らせない為の処置だった。

王国側と騎空団側のみになり、話し合い。ある程度の譲歩と協力を取り付け、騎空団が訓練中は王国側は近くにトータス人を近づけない事やその他エルーンとドラフに関

する幾つかの条件を設け約束し、騎空団は可能な限り協力するが原則技術協力はしないといった方向で話はまとまった。

しかし、騎空団と召喚組の溝は以前存在した。そして、その後の問題も起こるべくして起こったと言っても過言では無かった。